

一物の見方、考え方— 経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

1. まえがき

我が国の国公私立の大学数は2008年4月には歴史上最大の765校になる。

結果として年間50万人を超す学士さんが社会に送りだされることになる。

定員割れで経営が苦しく悪化する大学が相次ぐ中で、大学の総数の増加は、大学生そのものの質の心配があり、勉強せずに大学に全入する時代の到来である。

私は、若者の人間力、教養力が現実の社会の動きについてゆけずミスマッチしていることに起因するトラブルが発生していると考え、経営に生かす仏教哲学ということで人間力、すなわち社会人としてかねそなえるべき教養や常識等について過去数回にわたって述べてきたが、実際の経営に関する若者の人間力と暗黙知について考えてみることにする。

現代の若者の「人間力、教養力」は、教学上から、

- 1) 常識力……小、中学校の義務教育と家庭教育によって^{つとま}られる。自己中心的な考えが多い。
- 2) 基礎知識力……高等学校の教育、体験で得る。
- 3) 専門知識力……大学での専門教育、体験で得る。
- 4) 応用知識力……大学院での専門研究教育、専門職大学院での教育。

と考えているが、核家族化と少子化で1)の常識力は著しく低下している。2)の基礎知識にいたっては、これも全入時代で、大学の定員充足率が40%の大学で不足という現実でこれも低下、本来なら応用知識力がほしい大学生ですら欠如しているといわざるをえない。結果として実力のない学士さんが社会に送りだされていることになる。

著者：広島大学生物生産学部講師
元近畿大学産業理工学部客員教授
日本禅画家協会名誉理事
中国少林書画院名誉教授
法号位 法印 禅画位 奥伝
青木伸雄
(野風生)
雅号 樹泉

要はこの常識、基礎、専門、応用の4つの力のあるバランスのとれた、全部門で100点に近い学生がハイフラット人間でバランスのとれた学生である。

大学教育の現状を十二分に理解して、経営者や管理者に人材の活用をお願いしたい。

それは、「これ位は知っているだろう」という「暗黙知」を下げていただき、「いって聞かせて、やって見せ、させて誉めてやらねば、人は育たず」という山本五十六大将の実践論が必要であり、結果として三年で退社する若者が減少すると思われる。残念ながらこれが一般論であると愚考する。

叱られも、怒られもせず育った若者は、善悪の区別ができないといえはあげさだが、比較的無責任であり企業倫理に反して悪事に加担する。要は若者を生かすも殺すも経営者、管理者次第である。ヒューマンエラーに起因するトラブルをさける為に以下述べる。

2. 縁起を考える

仏教でいう縁起(バティツチャ・サムパータ)とは因縁生起の意味で、一切の事物は固定的な実体をもたず、さまざまな原因(因)や条件(縁)が寄り集まって成立しているということがその根本思想であり、因縁、因果の「縁って起こること」を原義としている。一般に原因をたずけて結果を生じさせる作用であり、因と同意にも用いられる。

人間の苦しみ、悩みがいかにか成り立つのかということ考察し、その原因を追求したものに「十二縁起」がある、以下それについて述べ考えることにする。

「十二縁起」という仏教の教えでは、

- 1) 無明(無知)……一般に自覚不能の根本的な生存欲に起因するもの。
- 2) 行(潜在的形成功)
- 3) 識(識別作用)……記憶や意志による判断作用。
- 4) 名色(名称と形態又は物質、心身)
- 5) 六処(心作用の成立する六つの場)……眼、耳、鼻、舌、身、意をいう。
- 6) 触(感官と対象との接触)
- 7) 受(心の感受作用)
- 8) 愛(盲目的衝動、妄執)……渴きにたとえられるものをさす。
- 9) 取(執着)……善悪の行為(業)の直接原動力。
- 10) 有(生存)……輪廻的な生存。
- 11) 生(生まれること)……苦はここから始まる。
- 12) 老死(無常な姿)……輪廻的な生存に必然的にもなう色々な苦。

基本的に「十二縁起」は、順次前のものが後のもの